

## 「ホントか？」「そんなはずはない」——語学学習における母語の活用

英語は日本語に置き換えるのではなく英語のまま覚えるようにしないと、いつまでたっても使えるようにならない・・・グローバル化に適応するための「コミュニケーション志向の英語学習」においては、こんな（一見もっともらしい）言説がよく聞かれます。確かに、英語を運用する際にいつも日本語を介在させるのは時間や思考のムダですし、現実的ではありません。けれども、英語によるコミュニケーション能力の向上のためには母語を排除するのが常に最善の策かというところでもありません。ネイティブの言語感覚への「橋渡し」として、むしろ母語を積極的に活用することが有効だと考えられる場合もあります。ここではいくつかの英語の動詞を例として、その意味・用法を日本語で考えてみることによって「ネイティブの英語」に少しでも近づくための試みとしたいと思います。

## challenge —— 「それはおかしいんじゃないか」と言う、「どうだまいったか」と言う

この語は「・・・に挑戦する」という訳が代表的ですが、英英辞典を見ると “to say or show that (something) may not be true, correct, or legal: DISPUTE; to question the action or authority of (someone); to test the ability, skill or strength of (someone or something): to be difficult enough to be interesting to (someone)” (MWALD) などと定義されています。これから「ある(既存の)事物の真実性・妥当性・正当性に対して疑いの態度を示す、相手の能力・技能を試す[の限界に挑戦する]」の意味で用いられることがわかります。「それはおかしいんじゃないか」あるいは「どうだまいったか」というニュアンスです。次例参照：

- (1) A number of doctors are challenging the study's claims. (MWALD)
- (2) The new data challenges many old assumptions. (MWALD) (従来の仮定は間違っていたんじゃないか)
- (3) She does not like anyone challenging her authority. (OALD<sup>6</sup>)
- (4) It's a game that will challenge a child's imagination. (MWALD) (まいったか、ここまでの想像力はないだろう)

## claim —— 「ホントか？」と思うようなことを言う

この語は「・・・を主張する」ということですが、英英辞典では “to say that something is true although it has not been proved and other people may not believe it” (OALD<sup>6</sup>) と定義されています。これは「相手はそう言っているが、それをそのまま信じてよいかわからない」ということで、言われた側としてはつい「ホントか？ ホントにそうか？」と言いたくなるということです。次例参照：

- (5) Marco claims he saw a flying saucer. (Chambers SD) (空飛ぶ円盤を見た——ホントか？)
- (6) The man claimed (that) he was a long-lost relative. (MWALD)
- (7) He claims to know nothing about the robbery. (MWALD)
- (8) The organization claims to represent more than 20,000 firms. (Macmillan)  
(その組織／団体の公称会員数は2万社以上である——ホントか？ ホントにそんなに多いのか？)

## dispute —— 「それはおかしい、そんなはずはない」と言う

この語は「・・・に反論する、・・・に異議を唱える」ということで、英英辞典では “to say or show that (something) may not be true, correct, or legal” (MWALD) と challenge の場合と同じ定義がされていることもあります。この語は通常「ある事柄に対して、何らかの強い確信や根拠に基づいて異論を唱える」という場合に用いられ、「それはおかしい、そんなはずはない」という気持ちを表します。次例参照：

- (9) The election result was disputed. (OALD<sup>4</sup>) (その選挙結果はおかしい、そんなはずはない)
- (10) The family wanted to dispute the will. (OALD<sup>6</sup>) (その遺言状の内容はおかしい、異議を申し立てたい)
- (11) The usual attribution of the work to Leonardo is now disputed by several experts. (CALD<sup>3</sup>)  
(通常その作品はレオナルドの作であるとされているが、何人かの専門家がそれに異論を唱えるようになった)
- (12) I need to dispute a credit card bill. (ネット)  
(クレジットカードの請求書を見て)これはおかしい、こんなに使っているはずがない、異議申し立てをしたい)
- (13) If a student wishes to dispute a grade, he or she should contact the Instructor. (ネット)  
(成績に異議がある場合は[こんな悪い成績であるはずがないと思う場合は]、担当教員に連絡すること)

## explain —— 「(これは)・・・なんですよ」と言う

この語はもちろん「・・・を[・・・について]説明する」で、英英辞典では “to tell somebody about something in a way that makes it easy to understand; to give a reason, or be a reason, for something” (OALD<sup>6</sup>) と定義されています。この語は「ある事物について十分な知識・十分な理解を持っている人がそれについて知識・理解がない人に対して『(これは)・・・なんですよ』という気持ちでわかりやすく説明・解説する」という感じで用いられ、そのような説明・解説を受けた側は、「ああそうだったんですか、(なるほど)そうなんですか」と初めてわかる(そしてモヤモヤした気持ちが解消されてスッキリする)というわけです。次例参照：

- (14) Can you explain how to use the microwave? (電子レンジの使い方がわからないんだけど、教えてくれる？)
- (15) The guide explains how to identify edible mushrooms. (LAAD) (食用キノコはこうやって見分けるんですよ)
- (16) He explained the proverb in detail. (「その諺はこういう意味なんですよ」——「ああそういう意味なんですか」)
- (17) Alex explained that his car had broken down. (OALD<sup>6</sup>)  
(「車が故障してしまったんですよ(だから遅れてしまったんですよ)」——「ああそうだったんですか」)